

ジェンダー, 歴史教育と博物館

台湾での経験を例に

Genger, History Education and Museums:
A Focus on Experiences in Taiwan

黄貞燕

JANYEN Huang

はじめに

① ジェンダーと歴史研究, そして博物館

② 台湾におけるジェンダー研究とジェンダー平等運動

③ ジェンダーというテーマをどのように台湾の博物館に取り入れるか

④ 博物館, 女性史の収蔵・展示と歴史教育

⑤ 結論

[論文要旨]

1985年、国連で正式に示された「ジェンダー主流化」の理念を受け、台湾では関連政策の制定も進んだ。そのなかでも、2012年に制定された「ジェンダー平等教育法」は、台湾の公立博物館に対して、収蔵・展示・研究、来館者サービス、人事などについて、ジェンダー平等の意識や原則を進めることを求めており、経営管理における原則の1つとされている。

しかしながら、台湾の博物館がジェンダーに関してステレオタイプの社会的価値観や歴史的思考への対応や反省を積極的に行っている主な要因は、国のジェンダー平等政策ではない。歴史学においてジェンダー視点を通じた歴史解釈の新たなパラダイムが熱心に探求されていることをふまえ、国立台湾歴史博物館におけるジェンダー問題への関心は、パブリックヒストリーの中で女性の姿をどのように描くか、特にそれをどのように収蔵し、展示するのかという点に集中している。たとえば、2003年「台湾女性研究計画」の策定をふまえ、2008年～2011年の「台湾女性の映像記録」では、オーラルヒストリーによって社会の下層や弱者の個人の経験を収集、記録、展示し、あわせて取材の現場やプロセス自体を歴史資料として記録するといった手法もとられている。このような試みは、女性に限ったものではないが、ジェンダー問題において重視される女性主体の叙述、多元的な歴史視点、女性は歴史に存在するなどの主張に呼応するものであり、多元的な歴史資料を収集するという新たな方法の開拓につながってきた。

歴史解釈の民主化を重視することは、戒厳令解除後の台湾における社会発展の特徴の1つである。パブリックヒストリーの重視もこのような社会的な背景のなかでおこなわれてきた。展示とジェンダーについていえば、これまでの「私的」領域における成果を、いかに「公的」領域に戻していくのが今後の課題となろう。

【キーワード】博物館とジェンダー 国立台湾歴史博物館 ジェンダー平等教育法 オーラルヒストリー パブリックヒストリー

はじめに

博物館は、歴史研究と教育の一端を担う重要な機関であり、収蔵・展示・教育を通じて、過去を保存し、現在を明示し、未来に影響を及ぼす。近年、台湾の博物館で注目されるテーマの 1 つが、ジェンダーに関する歴史認識や社会的価値などを問い直すことである。大きな歴史の中での女性の経験、外国籍の花嫁、同性愛などをテーマとする展示が、相次いで企画されている。台湾において、ジェンダー論はどのように博物館に取り入れられているのか。また、それは歴史を扱う博物館にとってどのような影響があるのか。

本論では、まず、欧米のジェンダー論が歴史研究や博物館に与えたインパクト、台湾におけるジェンダー研究やジェンダー平等運動の概況を整理し、ジェンダー平等の主張が台湾の博物館にどのように取り入れられているのかを分析する。そして最後に、国立台湾歴史博物館を例として、パブリックヒストリー（民衆の歴史）への配慮に基づく「歴史に女性を登場させる」いくつかの試みを紹介し、同館における収蔵や展示の新たなモデル確立について重点的に説明する。

①……………ジェンダーと歴史研究、そして博物館

ジェンダー理論は、歴史研究に大きなインパクトをもたらした。ジェンダー理論が歴史研究に取り入れられるきっかけは、女性運動やフェミニズム視点による女性史研究の登場にさかのぼる。本節では、台湾で最も深くこのテーマに取り組む学者・俞彦娟のアメリカを対象とした関連研究(2001)を紹介し、アメリカの女性史やジェンダー史における主な論点、歴史学へのインパクトなどを確認する。また、林慧嫻[林 2005]の論文を取り上げ、ジェンダーの問題が欧米の博物館に及ぼした影響を振り返る。

2001 年、俞彦娟はアメリカの女性史、ジェンダー史について論考を発表した[俞 2001]。俞によれば、1960 年代末の女性解放運動は、その時代の女性が受けている差別や抑圧を検証しながら、他方ではその原因を歴史に求め、古来より女性の声や経験が意図的に無視され、排除されてきたことへの気付きをもたらした。こうして女性史の研究がゼロから始まり、女性解放運動に影響を受けた新たな女性史の方法は、歴史資料の分類、研究手法や解釈などの面で、歴史学にも大きなインパクトを与えた[俞 2001: 208]。それ以前にも女性史は研究されていたが、ほとんどは歴史の主流を補うような内容であり、「補足的な歴史」と呼ばれた。つまり、それまで無視されてきた過去の傑出した女性の業績や経験を、既存の男性的価値観から探るものであり、「理想的な」「傑出した」女性の研究であるにすぎなかった[俞 2001: 211]。

史学史の角度から見ると、60 年代末の女性運動から生じた女性史研究の理論的な仮説と方向性は、女性運動の信念に大きく影響されている。当初から明確な政治的目標があり、歴史を通じて女性の経験を把握することで、その自尊心を高め、運動の展開に資するよう団結を促すことが期待された[俞 2001: 208]。このような研究は、フェミニズム女性史研究であるといえ、歴史学の主流に、次のようなインパクトを与えた。「個人的なことは政治的なこと (The personal is political)」とい

う女性運動の有名なスローガンにより、従来の歴史研究では、プライベートで個人的な、客観性のない、非科学的なものとして、公の場で検討すべきではないと考えられてきた個人の経験が、公に検討され、研究されるべき重要なものと認識されるようになる。こうして、妊娠、中絶、性生活、DV、子育てなど、女性個人の経験が、いずれも女性史研究や検討の課題となった〔兪 2001：214〕。また、新興の社会史研究の影響を受け、女性史研究においても、人類学、民族誌、統計資料など、他の学問分野の資料が大量に使われるようになり、歴史資料の範囲も、小説、日記、映画、文学、民謡、音楽、教会資料、口述記録など、幅が広がっている。同時に、女性運動は、女性史研究にとって現代的意義のある研究テーマを示し、既存の歴史学に新たな活力を注入している〔兪 2001：217〕。

フェミニズム視点の女性史研究は、歴史学にインパクトを与えただけでなく、多くの論争も巻き起こした。1980年代以降の「ジェンダー」という角度からの批評が最も重要である。女性運動と結びついた女性史研究では、白色人種・東北・中産階級・プロテスタントの女性が主な対象であり、有色人種や労働者、バイセクシュアルなどは無視されており、排他的であるという。また「差異性」が無視されており、普遍的な「女性」というものが定義され、女性の間には必然的に共通の感情があるとされる〔兪 2001：208, 209, 222, 204〕。

1980年代末、ジョーン・W・スコットはジェンダーの定義を、マルクス主義、心理分析とフーコーの権力論を結び付けながらすべきであると主張し、またジェンダーを両性間に認知された差異に基づく社会関係の構成要素と、権力の関係を示す方法として捉えた。したがって、「女性の経験」ではなく「ジェンダー」こそが歴史研究の要点であり、アイデンティティは個人の経験により決まるのではなく、ジェンダー観や関連する社会的規範、社会的関係の影響を受けるものであり、「絶対的」ではなく「相対的」なものだという。過去の男性的価値を中心とする歴史研究を打破るために重要なのは、異なる社会や歴史を研究することであり、どうやって生物学的な「性（セックス）」を社会的な「性別（ジェンダー）」に変えていくかである。これには、道徳的規範、政治観、個人の主体性の問題が含まれる。歴史研究の意義は、個人が経験したことの意味づけに影響する社会的メカニズムの把握にあり、個人の経験から歴史を再構築することではない。ジェンダー史研究者の考えでは、より広範な新しい歴史研究のパラダイムと解釈の枠組みをもたらすのが「ジェンダー」であり、ジェンダーは女性史研究のほか、あらゆる歴史の再解釈にも用いることができる。ジェンダーは「人種」「階級」と同様の重要性をもつ歴史研究のテーマである〔兪 2001：226〕。

学術史の観点から見ると、ジェンダー史の主張は新たなパラダイムの構築において際立っているが、しかし、女性史とジェンダー史との違いや女性史研究の重要性に関する議論は、それで決着するわけではない。反対者の指摘によると、ジェンダー史の研究では個人の経験や社会的価値はすべて相対的なものと見なされ、そのため、いわゆる「女性差別」は存在しないことになり、男女平等や女性解放を勝ち取るための努力も意義を失う。ジェンダー史は女性の経験に無関心であり、その研究の視点は、フェミニズムや女性運動を麻痺させるものだという。つまり、ジェンダー史の研究は女性史に取って代わることはできず、特に女性史に関連付けられた社会制度改革という政治目標に関して、ジェンダー史はなんの役にも立たない。女性史は女性のためのものであり、社会に存在する不合理な性別関係を変えるための研究なのである。ただし、ジェンダー論の影響を受け、フェ

ミニズム史研究でもジェンダーという視点を取り入れつつあり、歴史は一元的ではなく、多元的なものだと主張している〔兪 2001：229-232〕。

以上のような女性史、ジェンダー史の視点や主張は、博物館の世界にどう影響しているだろうか。現代社会における様々な声を表現する場として、博物館は女性運動やジェンダー平等運動に密接に関わってきた。欧米の例では、女性運動の歩みと共に、女性の作品や女性に関わるモノを収蔵する女性博物館が登場している。代表的なものは、女性芸術家に特化したワシントン D.C. の「国立女性美術館」(National Museum of Women in the Arts)、科学技術・ビジネス・宗教・芸術・女性解放運動などの分野における女性の業績を幅広く記録するダラスの「女性博物館」(The Women's Museum: An Institute for the Future) など。同性愛をテーマとする博物館としては、ベルリンの「ゲイ博物館」(Schwules Museum) があり、同性愛者が受けた迫害や同性愛権利運動の軌跡などが記録される。1980 年代には、ジェンダー平等の主張に応えるべく、一部の博物館が女性の声やイメージを展示に取り入れる試みを始めており、いかに歴史に女性を登場させるかという課題に、特に焦点が当てられている。

林慧嫻は、博物館の収蔵や展示に関する欧米のフェミニストによる議論を整理した〔林 2005〕。フェミニズム博物館学者のポーター (Geby Porter) は、過去の歴史叙述モデルが、女性がどのように「収蔵されるか」に影響したと指摘している。歴史の記録・定義・解釈を含む、歴史を叙述する権利は、長い間、男性が握ってきた。女性の声はかすかであり、それらの状況が、女性に関する歴史的・物的証拠についての認識や保存状況にも影響している。また、かつて女性の生産活動は家事が中心であり、その物的証拠は従来の博物館の収蔵基準に合わなかったということもある。さらに、フェミニズム美術史学者のノックリン (Linda Nochlin) は、教育機会や政治・経済的な主導権など「社会的メカニズム」の不平等が、女性の発展を制約する要因だと指摘する。例えば、かつて少数だが美術学校で学ぶことのできた女性はいたが、彼女たちはヌードデッサンへの参加が認められなかった。そのため、人体を正確に描く能力が養われず、当時主流であり高度な芸術と見なされた歴史画の制作に携わることができなかった。このことは間接的に、女性が「偉大な芸術家」となる可能性に影響している。

博物館において「女性の声」をどのように表現するかという課題もある。フェミニズム博物館学者のスミス (Barbara Smith) は、たとえ女性に関するモノを用いたとしても、必ずしも女性の声を表現することにはならないと嘆く。彼女は、十八世紀をテーマとする展示に、室内装飾品や陶磁器、さらには厨房の鍋釜や食器の類が並べられているのを見たという。従来の男性的な視点から展示が企画されており、女性の作品などは「目に映っても見えない」ようである。ポーターは、客観性や理性に偏重する従来の立場を果敢に打ち破り、主観的な経験や感情の展示を試みる必要があると主張する。要するに、歴史の記述におけるジェンダー論の意義は、従来の立場や価値観、手法などの束縛や解釈の可能性を全面的に問い直すことにあり、女性だけを重視することではない。

②……………台湾におけるジェンダー研究とジェンダー平等運動

1980 年代、国立台湾大学、国立清華大学、私立高雄医学大学などに「女性研究室」が相次いで

設置され、台湾における男女研究（両性研究）や女性研究の先駆けとなった。男女研究（両性研究）の枠組を超えたジェンダー研究が行われるのは、台湾では1990年代中頃になってからであり、その象徴的な年が、1995年である。この年、台湾大学の建築・都市農村研究所に「ジェンダー・空間研究室」(Research Center of Gender and Space)が、中央大学には「性／別研究室」(Center for the study of Sexuality and Difference)が、それぞれ設置された。前者は、空間環境におけるジェンダーの問題に着目し、「ジェンダー差別のない都市」づくりを目指すものだが、その焦点は、依然として女性と空間の問題に当てられた。一方、後者は、より多元的なジェンダー研究のテーマや手法の拡充を目指したもので、特に階級、エスニックグループ、性別、年齢など社会的な差異を同性愛などのテーマと結びつけた研究を行い、「性(=セックス)」「別(=違い)」「性別(=ジェンダー)」を区別するなどの問題意識を重要視する〔魏懋文1996〕。その後も1998年には、学術研究を主導する中央省庁である科学技術部に「ジェンダー研究」の学問分野が正式に設けられ、多くの大学にジェンダー研究所が設置された。名称を変える関連機関や刊行物もあり、従来の「婦女(=女性)」に「両性(=男女)」や「性別(=ジェンダー)」が加わった。このような中国語名の違いに関わらず、その英語名は、ほぼすべて「gender」とあるという点は興味深い〔李貞徳2009:5〕。

台湾におけるジェンダー研究は、どのような成果を上げているのか。また、どのような特色があるだろうか。この点を整理、分析した2つの論文がある。黄淑玲・潘櫻花は、ジェンダーと分野横断研究をテーマとする台湾で唯一の学術誌『女学学誌』⁽¹⁾を対象に、1990年から2007年までに発表された全論文のテーマ、手法、対象を整理している〔黄・潘2010〕。その分析結果によると、『女学学誌』には非常に幅広いテーマの研究が掲載されており、特に2002年以降は、様々な特別テーマが開拓されている。人文・社会科学のほぼすべての学問分野、医学では公衆衛生や看護などの研究者が寄稿しており、同時に、女性・ジェンダー研究のテーマ、手法、理論について学際性が重視されている点がきわめて特徴的である。ただし、内容は女性研究のカテゴリーでの研究に偏っており、同性愛、トランスジェンダー、男性研究などは非常に少ない。研究のテーマでは、「家庭」(21件)、「仕事」(21件)、「社会と科学技術」(21件)、「理論」(19件)、「性役割」(19件)の5つが『女学学誌』掲載数の上位を占めている。「家庭」については、親族関係、結婚歴、嫁姑問題、親との同居、家庭内の地位、家庭内の同権、家庭内の経験などのテーマが見られ、「仕事」については、女性の雇用、労働参加、働く女性、農業現場の女性、看護やケア、伝統手芸などがある。「社会と科学技術」では、中高年の女性の健康、産婦人科などの医療、うつ病などの心の病気に関するテーマにほぼ集中している。「理論」では、様々な分野や問題についてフェミニズム理論が論じられ、「性役割」のテーマでは、役割ストレス、役割態度、性別役割分業、母親の役割、父親の役割などが検討されている。著者は、台湾のジェンダー研究には注目すべき点が2つあると指摘している。1つは、台湾の研究は、国外の初期フェミニズム研究のように、質的研究の強調に偏っている点である。つまり、社会的統計や分析を活用した研究は行われておらず、よって、女性・ジェンダー研究における量的理論や知識については、今後の開拓が待たれる。もう1つは、ジェンダー理論の研究が手薄だという点である。

黄淑玲・謝小岑は、台湾における社会学、教育学、西洋文学・文化研究の3分野について、1990年から2007年までのジェンダー研究に関する論文の概況を調べ、それにより当該3分野における

ジェンダー研究の主流化の度合いやフェミニズム理論の影響力を評価した〔黄・謝 2011〕。著者は、これら学術分野の主要な定期刊行物について、出版数や分析の視点、研究手法、研究テーマなどを整理している。その指摘によると、3 分野の定期刊行物におけるジェンダー研究の論文発表率は低く、ジェンダー研究は女性や女性らしさに関する研究のサブカテゴリーと見なされており、主流のテーマにはなっていない。

また同じ著者は、さらに考察を進め、3 分野におけるフェミニズムの影響力には大きな差があると指摘する〔黄・謝 2011：220-221〕。社会学では反省や批判、社会实践という特徴が強調され、これはフェミニズムにかなり近い。そのジェンダー研究者におけるフェミニズムへの共感是最も高い。教育学では、その特質として規範性や機能性が強調され、権力関係や社会批判を強調するフェミニズムとは相反しており、ジェンダー研究も周辺に位置づけられる。そのジェンダー研究者におけるフェミニズムへの共感是最も低く、そのため、ジェンダー平等の教育がすでに重要政策であるにも関わらず、教育学の主流では重要視されていない。西洋文学や西洋文化の研究分野におけるジェンダー研究では、政治性の高いフェミニズムの価値を多くの研究者が軽視しており、テキスト研究の枠から脱していないため、ジェンダーに関する学術研究と女性運動との結びつきが効果を発揮していない。

このほか、黄淑玲・謝小岑は、台湾におけるジェンダー研究では、学術研究と社会運動との相互の結びつきが、やはり重要な特色であると考え〔黄・謝 2011：184-186〕。カギを握るのは 1993 年に設立された台湾女性学学会であり、同学会の主張する女性研究、フェミニズム、女性運動の三位一体という視点は、台湾におけるジェンダー研究者のコンセンサスとなっている。女性学学会の会員は、主に国家体制の外を社会活動の場としており、デモ行進、ヒアリング、記者会見、街頭演説などを行って、ジェンダーに関する法律や政策を呼びかけ、また書籍の出版、記事の寄稿、学生への講義、地域での講演会などを通じて、家父長制的な文化を批判している。多くのジェンダー研究者は女性運動に直接参加しており、その運動で注目される問題、戦略、プロセス、成果を、ジェンダー研究において政策・制度改革を検討し、推進する際の目標としている。

以上のことから分かるように、台湾のジェンダー研究は、社会学、教育学、文化研究などの関連分野における状況が理想的とはいえず、女性らしさに関する研究テーマと見なされて重要視されない場合すらある。しかし、他方では、学際的なジェンダー研究の学会や定期刊行物に志のある研究者が集まり、ジェンダー研究分野の議論を展開させており、関連する運動と呼応することも重要視されている。

李貞徳の指摘によると、思想的な解放を背景として、台湾の女性運動は 90 年代に入り、性的暴力への反対、財産権の保障、労働権の追求など、要求が多様化している〔李 2009〕。街頭運動や抗議行動なども、かなり活発化する。女性の権利を掲げたこれらの運動だが、階級やエスニックグループの利益などが衝突することも多い。つまり、かつてジェンダー研究者が指摘したように、「女性」は同質のグループではないという事実が、台湾の社会運動において立証されているといえる。

1985 年、国連で正式に示された「ジェンダー主流化」(gender mainstreaming) の理念では、立法、政策、計画などを含む各種の計画的行動を評価し、男女の双方が均等に利益を受けるようにして、ジェンダー平等という最終目標を達成することが主張された。この国際宣言は、中央政府が重

視しただけでなく、フェミニズム学者や社会団体もこの新たな方針を積極的に取り入れた。ジェンダー主流化の概念が導入されたことに伴い、関連政策の制定も進んだ。具体的には、ジェンダー平等三法と呼ばれる「セクシャルハラスメント防止法」(1995)、「男女労働平等法」(2001)、「ジェンダー平等教育法」(2004)⁽²⁾の成立である。

女性から男女(両性)やジェンダーへと、台湾における女性運動の行動の焦点や思考モデルは、明らかに発展し、変遷している。しかし、国のジェンダー平等政策は、現段階では女性の権利を保障することを実務上の重点としているにすぎない。2005年、行政院女性権利促進委員会はジェンダー主流化を推進し、各部・委員会にジェンダー平等特別チームを設置した。行政院とその所属機関の計500以上の委員会について、女性委員の比率を三分の一以上とする原則などが定められた。つまり、台湾における国のジェンダー平等政策は、現段階では、国家フェミニズム(National Feminism)への偏りがあるといえ、女性の社会的地位や社会参加を改善し、保障することを主な目標としている。

③……………ジェンダーというテーマをどのように台湾の博物館に取り入れるか

台湾において、女性権利運動やジェンダー平等運動が博物館を中心に展開されることはまれである。2016年に開設された婦女救援基金会による「阿嬤=アマ(おばあさん)の家—平和と女性人権館」は、その数少ない例として近年注目されている。婦女救援基金会は1992年から台湾人の元慰安婦の調査に取り組み、日本政府への賠償請求に協力している。20年以上にわたり、元慰安婦のおばあさんたちに寄り添ってきただけでなく、5,042件の録音、録画、書籍および730点の収蔵品を集め、元慰安婦59人のライフストーリーを記録している。「慰安婦」の人権運動を基礎として、現代の女性人権問題について展示を行い、女性を力づける台湾初の多機能な社会教育基地といえる⁽³⁾。



『勇士與彩虹』財団法人台北市婦女救援社会福利事業基金会，2017年

それでは、ジェンダー平等に関する台湾の法律や政策は、博物館にどのような影響をもたらしているだろうか。国立台湾歴史博物館を例にとると、次の 2 点が挙げられる。2004 年の「ジェンダー平等教育法」第 18 条には、「学校教材の編纂、審査、採択は、ジェンダー平等教育の原則に適合しなければならず、教材の内容は各ジェンダーの歴史的貢献や生活経験をバランスよく反映させ、多元的なジェンダー視点を示さなければならない」と規定されており、博物館では、常設展示の等身大人形の男女比率に過度の隔たりが生じないように特に配慮している。さらに重要なのは、女性が登場する歴史的場面を、常設展示に意図的に追加することである。例えば、先住民族と漢族が土地租借契約を結ぶ場面では、記録によると、先住民族側の代表者には男性も女性もいて、男性が多数であったが、常設展示では意図的に女性が前面に出る場面設定にしている。また、清の時代に艋舺（現在の台北市万華区）で成功した有名な女性商人・黄祿嫂を登場させているが、これも珍しい例である⁽⁴⁾。つまり、従来は多数を占める普遍的な現象を優先させるのが歴史叙述の原則であったが、ジェンダー平等という原則の下では、ステレオタイプの歴史観やジェンダーイメージが生じないように、歴史にひそむマイノリティーの姿を重視している。このほか、台湾では 2012 年に実施が始まった「女性に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」に対応すべく、博物館では「ジェンダー平等計画」を定め、収蔵・展示・研究、来館者サービス、人事などについて、ジェンダー平等の意識や原則を推進している⁽⁵⁾。つまり、台湾の公立博物館の現場では、国の法律や政策の推進を通じて、ジェンダー平等の原則が浸透しており、経営管理における原則の 1 つとされている。



国立台湾歴史博物館展示より「日本時代の新女性」（著者提供）



同 女性商人・黄禄嫂（著者提供）

しかしながら、台湾の博物館がジェンダーに関してステレオタイプの社会的価値観や歴史的思考への対応や反省を積極的に行っている主な要因は、前述した国のジェンダー平等政策ではない。様々なエスニックグループや文化を含む複雑な共同体である台湾では、多元的な文化に関わる問題への関心が高い。中でもジェンダーの問題では、代表的なものとして、例えば台湾先住民族のジェンダーと権力の多様な関係、およびそれを反映する社会構造があり、また近年は新たな移民として台湾に嫁いでくる外国人女性への関心が高まっている。1990年以降、台湾政府は外国人労働者や東南アジア・中国からの結婚移民に門戸を開き、台湾の地域文化はその多元性と混成性（hybridity）を増している。外国からの花嫁は、一般的な外国人労働者とは異なり、台湾の家庭に入って新たな世代の母親となるため、台湾の家族構造やローカルな文化に無視しがたい影響を及ぼす。しかし、経済的に遅れた東南アジアからの花嫁は、商品のように見なされ、台湾社会に存在する男尊女卑の権力構造が助長され、家庭や社会において尊重されない場合も多い。近年は、新世代の社会への融合促進や社会一般における「新たな台湾の子」の母親への更なる理解（その母国文化や台湾で直面する違い、適応、意識の変化などを含む）に資することを目的とした展示や教育活動が少なからず実施されている。

それ以外にも、博物館学に関する豊富な研究や学術活動により、博物館に関係する現代社会の問題がすみやかに論じられ、実践されるようになっていく。台湾の「博物館法」が正式に成立したのは2015年だが、すでに1996年の段階で国立大学に博物館学の研究所（大学院修士課程）が設けられ、現在では博物館と名のつく研究所が台湾全土に3つ存在し、2つの学術誌が刊行されている。この10年は、博物館をテーマとするシンポジウムが少なくとも年平均5、6回は開催されている。博物館学の研究や教育の推進により、この20年以上、博物館に関する大量の研究論文が生み出され、その研究テーマは豊富になっている。社会的包摂という方向性からのジェンダー問題も近年注目されており、関連する展示が続々と企画されている。

④……………博物館，女性史の収蔵・展示と歴史教育

国立台湾歴史博物館の経験から

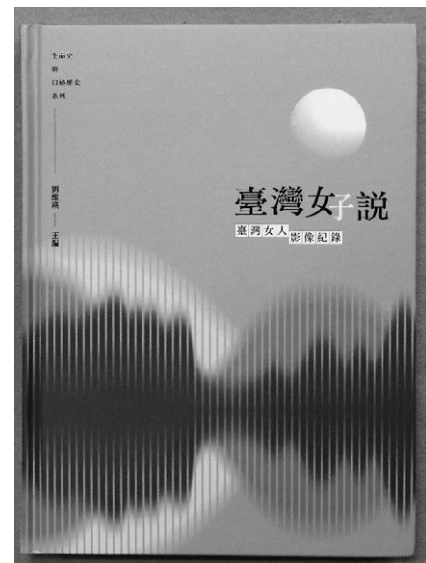
台湾において、ジェンダー論は歴史学にどのような影響をもたらしているだろうか。1990 年代以降、男女（両性）・ジェンダー意識の研究傾向は、中国史研究や台湾の明清時代の歴史研究を震撼させている。なぜなら、従来の歴史学で使われてきた文献は、ほぼすべて男性の手によるものであり、女性に関する記録もほとんどが男性の書いたものだからである。このため、歴史解釈の新たな視野やテーマを切り開く上で、ジェンダーの視点からどのように文献を分析するかということが、興味深くかつ挑戦に満ちた課題となる [李 2009]。

歴史学においてジェンダー視点を通じた歴史解釈の新たなパラダイムが熱心に探求されているのに対し、国立台湾歴史博物館におけるジェンダー問題への関心は、パブリックヒストリーの中で女性の姿をどのように描くか、特にそれをどのように収蔵し、展示するのかという点に集中している。パブリックヒストリーとフェミニズム歴史研究では異なる主張がされているが、両者には近い部分もある。フェミニズム歴史研究では、歴史を上から俯瞰する従来の視点を廃して、研究の重点を政治・軍事から経済・社会・文化の領域へとシフトすることが主張され、研究上の関心も為政者や英雄から、労働者や女性、その他の社会的弱者など、一般の民衆へと移ることになる。また公的な領域だけでなく、私的な領域、個人的な経験、主観的な感情などが重視され、実物資料や新聞雑誌、映画、脚本、日記など多元的な資料を使うことが主張される [兪 2001 : 216-217]。これらには歴史的文書としての価値が認められ、歴史の記述における男性視点や国という共同体の価値観を根本から暴き出し、性別に関する従来のステレオタイプのイメージを打ち破って、歴史解釈の可能性が追求される。これらの主張や歴史記述の可能性を多元的に広げるという目標は、後発のパブリックヒストリーの趣旨に近いものである。当然ながら、両者には大きな違いもあり、フェミニズム歴史学では女性やジェンダーに焦点を当て、女性の社会的地位の改善につなげることを目標とする。一方、パブリックヒストリーの研究は、人びとの生活や記憶に着目し、民衆のために行われるものであり、民衆自身が歴史を記述することも奨励され、大きな歴史と小さな歴史との対話をつなぎ、歴史的な想像と認識を広げることが目標とされる。

国立台湾歴史博物館は「みんなの博物館」として自らを位置づけ、社会的包摂や文化的同権などを促進する博物館の社会参加を責務とする。同館が進めているパブリックヒストリー計画には、「歴史に女性を登場させる」ために、新たな収蔵や展示の可能性を切り開く計画が含まれる。2003 年に博物館の準備段階で始まった「台湾女性研究計画」では、ウェブサイトを立てて研究成果を公開している。この計画では、身体文化、結婚と家庭、女性と台湾の民間信仰、女性と日常生活、女子教育、様々な職場における女性、女性の人物クローズアップ、女性の創作、女性運動という 9 つのテーマで女性に関する歴史資料を集めている。女性の生活経験が国の政治や社会経済、時代の雰囲気などどのように関連しているか、また女性が自分の置かれた環境にどのように向き合い、それをどう理解してきたのかを聞き取り、記録することが、その目的である。これらの取材調査は、オーラルヒストリーの資料としても意義がある。



劉維瑛責任編集『Watch Taiwan 女人当家』14号
国立台湾歴史博物館，2012年



劉維瑛主編『台湾好說—台灣女人映像記錄』
国立台湾歴史博物館，2016年

家庭から社会や職場への女性の進出，身体的束縛からの解放など，様々な問題意識から台湾史における時代ごとの女性のイメージが明らかにされることで，台湾女性の文化的特質が姿を現すことが期待される。2008～2011年に制作された「台湾女性の映像記録」では，「戦時中の女性の経験」と「女性の日常生活」という2大テーマ別に，60歳以上の女性48人から詳細なオーラルヒストリーの聞き取りを行っている。個人の経験を大きな時代の流れと結びつけることが意図されるだけでなく，口述記録やその取材の現場自体が歴史資料となるように工夫が凝らされている。このほか，個人のライフヒストリー単位での収蔵，その主観的な経験や感情を重視した展示など，博物館が収蔵・展示を通じてどのようにジェンダーの問題にに応じていくのかを考える上で，いずれも参考となる[劉2016]。

歴史資料の1つとして，オーラルヒストリーの第一の目的は，社会の下層や弱者の声を集め，スタンダードな歴史を問い直すことである。パブリックヒストリーでは，口述記録は重要な地位を占める。それは多種多様な民衆を歴史叙述の主体者とする媒体であり，歴史を書く上での新たなテーマや関心を広げることができる。この計画の中心人物である劉静貞（2016）は，計画を進める過程での省察をいくつか示している。まず，取材対象について具体的な基準を設けず，身の回りの人脈から広く求めること。つぎに，女性の生活経験をどのように質問するか，「日常生活」をどのように研究するか，という取材や編纂に際しての新たな問題がある。脈絡のある質問を設定して，対象者個人の命の脈動，つまり最も興味を引く部分をよりどころに，そこから徐々に導き出す。女性たちの記憶は，日常生活における彼女たちの喜怒哀楽と結びついており，土足で踏み込むことはできない。おばあさんたちの考え方や記憶に沿って，筋道をたどる必要がある。用意された質問に，対象者がすらすら答えられるとは限らず，話が飛んだり，繰り返しになったりする。また，いろいろな感情もある。しかし，そうした論理的でも理知的でもない表現こそが，語り手による自身の表現であり，その主体性を示すものである。

また、劉静貞は取材内容の記録についても新たな省察を行っている。インタビューの記録については、これまで多くの場合、整理、編集、修飾など、理解しやすい明瞭な文章や映像になるよう専門の人間が手を加えていた。しかし、語り手の口ぶりや表情、仕草などが、言葉よりも多くのことを伝える場合がある。このため、当該計画では、取材の現場やプロセス自体を歴史資料の一種と見なして記録し、音声・映像・文字をすべて残す方法を用いている。このように記録された内容は、誰もが容易に利用できる資料ではないが、オーラルヒストリーの資料価値を高めるという点では、意義が大きい。

これとは別に、国立台湾歴史博物館ではパブリックヒストリーの収蔵についても、新たな試みを行っている。同館では、外部からの寄贈もコレクションの重要な供給源であり、寄贈者の数は現時点で 300 人を超えている。コレクション全体の 23% が寄贈品であり、その展示も定期的に行われている。つまり、「民衆」や「民衆視点」の文物が一定の比重を占めているということであり、この点は、同館がパブリックヒストリーを重視していることに呼応する。2016 年の寄贈品展では、「職人」や「風俗」といった通常のテーマ以外に、「時代を生きた人物」と題する特別企画があり、台南金泉成雜穀店の夫婦、民間画家、助産師、舞踏家、スポーツ選手、写真家という 6 人について、彩り豊かなライフヒストリーが展示された。これらの収蔵品は家族から提供されたもので、その生涯の軌跡を明らかにすることを目指し、博物館の研究員が整理を行った。実際に見学した来館者は、個人的な史料の中から、従来の歴史学ではあまり記録されてこなかったその時代の情報を読み取るのである。例えば、林さんという助産師の展示では、当時の助産師養成の状況が分かり、免状や出産補助具などを見ることができる。あるいはスポーツ選手の展示では、芸術やスポーツの特別な才能が、日本統治時代に、どのように当時の台湾人の人生の可能性を広げたのかを目のあたりにすることになる。

「台湾の新移民（新台客）」の特別展は、1960 年代以降の東南アジアからの移住者や移民労働者の物語を紹介するもので、特に 1990 年代以降の展示に重点が置かれた。1990 年代以降の移住者や移民労働者は、ベトナム、インドネシア、タイ、フィリピン、カンボジアの 5 カ国からが最も多く、台湾へ来た理由は、仕事、勉学、結婚、あるいは夢を追うためなど、かつてのような政治的な要因ではなく、経歴も様々だった。特別展には、東南アジア各国からの 14 人の移住者や移民労働者が招かれ、その持ち物や映像、音声、創作などを通じて、様々な視点や角度から「新移民」の多様な様相を認識することができた。展示企画者が意図していたのは、彼女や彼らのライフストーリーにより、様々なエスニックグループの自尊心や誇り、個人の価値などへの我々の理解を深め、また、この世代のものである新たな台湾への認識を、この土地の人びとが深められるようにすることである。期間中は、展示の主役である本人が招かれ、ガイド役を務めた。その個人の経験を来館者と共有することで、展示が自己表現の媒体にもなった。

これまで述べたように、取材対象者の本人の感情を残すための口述記録の手法、あるいは、氏名が分かり、その人生、職業、感情も見える特定の個人やその家族を、国の博物館のコレクションに加えて展示の軸とすることは、パブリックヒストリーに配慮した歴史の記述に取り組んでいる国立台湾歴史博物館の重要な動きである。

⑤……………結論

歴史解釈の民主化を重視することは、戒厳令解除後の台湾における社会発展の特徴の1つである。したがって、民衆に向き合い、社会に向き合うことは、国の歴史博物館が自らを誇る職責となる。台湾の歴史博物館は、パブリックヒストリーを重要な軸として、個人単位や家族単位の収蔵を試み、それによりライフヒストリーを主体とする展示や教育に取り組んでいる。それゆえ、ジェンダー問題への博物館の対応は、実はパブリックヒストリーへの配慮の中に含まれている。その収蔵や展示は、なにも女性に限ったものではないが、しかしジェンダー問題において重視される女性主体の叙述、多元的な歴史視点、女性は歴史に存在するなどの主張に呼応するものであり、多元的な歴史資料を収集するという新たな手法も生まれている。ライフヒストリーを単位とする歴史知識が、どのように大きな歴史の流れと対話するのか、また、博物館における歴史の記述を、どのように「私的」な領域から「公的」な領域へと再び戻すのか。それが台湾の歴史博物館が省察を続け、実践していく課題である。

註

(1)——『女学学誌』は台湾大学女性研究室（婦女研究室）が1990年1月に創刊。当初の誌名は『婦女と两性学刊』で、年1回発行。2002年に年2回発行となり、誌名を『女学学誌：婦女と性別の研究』に変更。変更後は毎回テーマを設け、問題設定をしやすいとした。原稿募集や発行の対象は、全世界の華人コミュニティ。研究テーマは、家庭、学校、労働、医療、性自認、歴史、学術の場における女性の境遇とジェンダーの関係など。家父長制や男性中心の考えを批判し、それに代わるフェミニズムの視点や対抗策を提起する。人文・社会系とその他の研究分野の女性・ジェンダー研究者を結びつける役割を果たしている。

(2)——2005年に行政院女性権利促進委員会がジェンダー主流化を推進し、各部・委員会にジェンダー平等特別チームを設置。行政院と所属機関の計500以上の委員会について、女性委員の比率を三分の一以上とする原則などが定められた。

(3)——「阿嬷＝アマ（おばあさん）の家—平和と女性人権館」オフィシャルサイト：<https://www.twrf.org.tw/amamuseum/>。閲覧日：2018年3月23日。

(4)——2018年3月28日に行われた国立歴史民俗博物館（佐倉）「博物館とジェンダー」研究チームと国立台湾歴史博物館との交流座談会における、江明珊（国立台湾歴史博物館）による説明に基づく。

(5)——ただし、行政を通じて推進されるジェンダー平等は、形式にとどまる場合が多く、文化関連の業務では妨げになることもある。無形文化財保護事業の例では、国の指定するいくつかの無形民俗文化財の保護団体に対し、ジェンダー平等の専門家が、男尊女卑や女性差別の視点を含む習慣を改めるべく、管轄機関が指導するよう求めた。しかし、そのような要求は、無形文化遺産に関して各コミュニティの文化権やその多様な文化表現を重視する考えと抵触する部分がある。

参考文献

- 林慧嫻「尋找她的聲音：性別平權的博物館時代（彼女の声を尋ねて：ジェンダー同権の博物館時代）」『博物館学季刊』第 19 卷第 2 期，2005 年，23-32 ページ
- 李貞徳「導言 婦女，性別與歷史研究（緒言 女性，ジェンダーと歴史研究）」李貞徳編『中国史新論／ジェンダー史分冊』聯經出版社，2009 年，1-17 ページ
- 俞彦娟「從婦女史和性別史的爭議談美國婦女研究之發展（女性史とジェンダー史の論争から語るアメリカの女性研究の発展）」『近代中国女性史研究』第 9 期，2001 年，207-234 ページ
- 黃淑玲，謝小苓「運動與學術雙向結合：台灣性別研究發展之跨學門比較（運動と學術の双方向の結合：台湾ジェンダー研究發展の学際的比較）」『女学学誌』第 29 集，2011 年，173-231 ページ
- 黃淑玲，潘櫻花「簡析《女學學誌》：看台灣性別研究趨勢（『女学学誌』の分析：台湾ジェンダー研究の動向を見る）」『婦研縱横』第 92 期，2010 年，38-47 ページ
- 蔣淑如「女性主義史學視角下的國中臺灣史教科書（フェミニズム史学の視点で見る国民中学の台湾史教科書）」『中等教育』第 67 卷第 2 期，2015 年，67-81 ページ
- 劉維瑛「成就她們，故事才說得下去（達成した彼女たち，そして物語は語られる）」劉維瑛編『台湾好說：台灣女性の映像記録』国立台湾歴史博物館，2016 年，46-55 ページ
- 劉靜貞「尋訪女性生活詩篇 以紀錄片為方法的思考（女性の生活詩篇を訪ねて ドキュメンタリー手法の思考）」劉維瑛編『台湾好說：台灣女性の映像記録』国立台湾歴史博物館，2016 年，8-35 ページ
- 魏懋文「1995 臺灣：性別研究特定角度的興起（1995 台湾：ジェンダー研究の特定角度における興隆）」『婦女と両性研究通信』第 38 & 39 期，1996 年，31 ページ

（國立臺北藝術大學博物館研究所 助理教授）
（2018 年 12 月 7 日受付，2019 年 2 月 6 日審査終了）

Gender, History Education, and Museums : A Focus on Experiences in Taiwan

JANYEN Huang

In 1985, Taiwan began to develop policies on gender equality following the official introduction of the gender mainstreaming approach by the United Nations. One such policy was the Gender Equality Education Act, established in 2012, which requires public museums in Taiwan to promote awareness and the principles of gender equality with respect to their collections, exhibits, research, visitor services, and human resources and is regarded as a key principle in museum management.

However, national policy on gender equality was not the main reason behind why Taiwan's museums sought to reflect on and address stereotyped social values and historical ideologies relating to gender equality. As history scholars enthusiastically search for a new paradigm in historical interpretation from the perspective of gender, gender issues surrounding the National Museum of Taiwan History have begun focusing on questions such as "how should women be portrayed in public history?" and, in particular, "how should items be collected and displayed nowadays?" For example, following the introduction of the Research Plan for Taiwanese Women in 2003, the Taiwanese Women Video Recording Project, which ran from 2008 to 2011, used the method of collecting, recording, and exhibiting personal experiences of the lower-class and disadvantaged women society through oral history, while also recording the scenes and processes described by them in the interviews, as a historical record. Although such efforts are not limited to women, they were in line with women-centered narratives, pluralistic views of history, and arguments such as those emphasizing women's existence in history—aspects that foregrounded gender issues—and have led to the development of a new method in which museums collect a pluralistic variety of historical materials.

Emphasis on the democratization of historical interpretations is a characteristic of social development in Taiwan ever since the martial law was lifted. It was against this social background that importance was placed on public history. With regard to exhibits and gender, the subject of taking previous achievements from the "private" domain and returning them to the "public" domain should be considered in the future.

Key words: Gender and museums, National Museum of Taiwan History, Gender Equity Education Act, oral history, public history

性別, 歷史教育與博物館

以臺灣經驗為例

Genger, History Education and Museums:
A Focus on Experiences in Taiwan

黃貞燕

JANYEN Huang

前言

- ❶ 性別與歷史研究, 以及博物館
- ❷ 性別研究與性別平等運動在臺灣
- ❸ 性別議題如何進入臺灣的博物館
- ❹ 博物館, 女性歷史的蒐藏／展示與歷史教育
- ❺ 結論

前言

博物館透過蒐藏、展示與教育工作，保存過去、展示現在，並影響未來，是一個進行歷史研究與教育的重要機構。反思與性別有關的歷史認識，社會價值等，是臺灣的博物館近年關注的課題之一。有關大歷史中的女性經驗、外籍新娘、同性戀等的展覽主題，先後登場。在臺灣，性別論述如何進入博物館？對歷史類博物館帶來什麼樣的影響呢？

本文首先梳理在歐美性別論述對歷史研究、博物館帶來的衝擊，性別研究與性別平等運動在臺灣的概況，並分析性別平等主張如何進入臺灣的博物館，最後以國立臺灣歷史博物館為例，介紹該館在大眾歷史關懷下所進行的幾個「讓女人走入歷史」的計畫，特別著重該館如何建立新的典藏與展示的模式。

①……………性別與歷史研究，以及博物館

性別理論對歷史研究帶來很大的衝擊。然而，性別理論進入歷史研究領域的契機，應該追溯到婦女運動、以及女性主義觀點的婦女史研究之興起。本節梳理臺灣投入此主題最深入的學者、俞彥娟以美國為對象的相關研究（2001），彙整在美國婦女史與性別史的主要論點、對歷史學的衝擊等，以及梳理林慧嫻（2005）的論文，彙整性別議題在歐美對博物館帶來的影響。

1960 年代晚期的婦女解放運動，一方面檢視當前婦女受歧視與壓迫的現象，一方面從歷史找尋原因，發現自古以來女性的聲音與經驗被有意地忽略與消除，從而引發了從無到有的婦女史研究，也對歷史學在史料類型、研究方法與詮釋帶來很大的衝擊。在此之前，並不是沒有婦女史研究，但其內容幾乎都是為主流歷史提供補充式的修補資料，被稱為「補充式的歷史」，也就是說，仍然是從既有的男性價值觀找出那些過去被忽略的傑出女性之成就與經驗，因此只能說是「理想的」、「傑出的」婦女的研究。

從史學史的角度觀之，60 年代晚期婦女運動所引發的婦女史研究之理論假設與方向，受到婦女運動信念很大的影響，一開始就有很明確的政治目標，希望透過歷史了解女性的經驗，提高女性的自尊、促成團結，以有助推展婦女運動。這一波婦女史研究，可以說是女性主義婦女史研究，對主流歷史學的衝擊主要如下：婦女運動的著名口號「個人的即政治的」（personal is political），使過去歷史研究認為私密的、個人的、不客觀、不科學、不應該公開討論的個人經驗，被認為是重要的、應該加以研究並公開討論。因此女性個人的經驗，例如懷孕、墮胎、性生活、家庭暴力、教養小孩等，都成為婦女史研究與討論的課題。此外，受到新興社會史的影響，婦女史研究開始大量使用其他學科領域的資料，例如人類學、民族誌、統計資料等，大幅擴展了史料的範疇與類型，例如小說、日記、電影、文學、民謠、音樂、教會資料、口述歷史等。同時，婦女運動也為婦女史研究提供了具有當代意義的研究議題，為既有的歷史學注入新的活力。女性主義觀點的婦女史研究，為歷史學帶來衝擊的同時，也飽受爭議。最重要的意見，就是 1980 年代起從「性別」角度提出的批評。研究者指出，與婦女運動相連的婦女史研究，以白種、中產階級與新教婦女為主要對象，忽略其他有色人種、工人以及雙性戀等，因此具有排他性；同時，忽略了「差異性」問題，以為可以有一個通用的「女性」定義，而女

性之間必然有共通的情感。

研究者指出，「性別」才是歷史研究的重點，而不是「女性經驗」，認同不是由個人經驗決定，而是受到性別觀念與其相關的社會規範、社會關係之影響，是「相對的」而不是「絕對的」。要打破過去男性價值主導的歷史研究，重要的是，研究不同的社會與歷史，如何將生理的「性」變成社會的「性別」，包括道德規範、政治觀念以及個人的主體性問題。歷史研究的意義，不是從個人經驗重建歷史，而是要去了解影響個人經驗之意義建構的社會機制。性別史研究者認為，「性別」提供了一個更為寬廣的、新的歷史研究典範與解釋架構，不僅可用來研究女性歷史、還能夠重新解釋所有的歷史，是跟「種族」、「階級」一樣重要的歷史研究的課題。

從學術史觀點來看，性別史的主張似乎在新典範建構方面更勝一籌，但是，有關婦女史與性別史之間的差異、以及婦女史研究的重要性之爭議，並沒有就此打住。反對者指出，性別史研究認為所有個人經驗以及社會價值都是相對的，因此，所謂的「女性歧視」並不存在，想要爭取男女平等、解放婦女的努力，也就沒有意義，性別史不關心女性經驗，性別史研究的觀點，將癱瘓女性主義與婦女運動。也就是說，性別史研究不能取代婦女史，特別是性別史對婦女史所繫之社會制度改革之政治目標，並無所助益。婦女史是為婦女而做，為改變社會既有的、不合理的性別關係的研究。不過，受到性別論述的影響，女性主義歷史研究開始慢慢地納入性別觀點，主張歷史不是一元的、而是多元的。

上述婦女史、性別史的觀點與主張，如何影響博物館世界呢？做為現代社會發聲的代表場域，博物館向來與婦女運動、性別平等運動關係密切。以歐美為例，與婦女運動同步，出現專門典藏女性作品或物件的女性博物館，代表者如位於美國華盛頓特區的「女性藝術博物館」(National Museum of Women in the Arts)，專注於女性藝術家；位於達拉斯的「女性博物館：未來學院」(The Women's Museum : An Institute for the Future)，廣泛記錄女性在科技、商業、宗教、藝術及婦女解放運動等領域的成就；同性戀的主題博物館，如柏林同志博物館 (Schwules Museum)，記錄同性戀者遭受的迫害以及同性戀權利運動軌跡等。1980 年代，為了回應性別平等主張，有些博物館開始嘗試在展示中加入女性的聲音與形象，特別是如何讓女人走入歷史，更是焦點課題。

林慧嫻 (2005) 整理了歐美的女性主義者對博物館蒐藏與展示的論述。女性主義博物館學者波特 (Geby Porter) 指出過去歷史書寫模式，影響了女性如何「被蒐藏」。由於歷史書寫的權力長期掌握在男性手中，包括如何紀錄、定義、詮釋的權力，女性的聲音較為幽微，也連帶地影響到有關女性之歷史物質證據的認識與保存。此外，過去女性的生產以家務為主，相關的物質證據也不符合傳統博物館典藏標準。女性主義美術史學者諾克林 (Linda Nochlin) 則進一步指出，由於教育機會、政治經濟主導權等「社會機制」的不平等，是限制女性發展的重要原因。例如，過去，少數進入傳統藝術學院的女性，被限制不能參加裸體模特兒素描課程，因此欠缺精確描繪人體的能力，無法從事當時視為主流的、高等藝術的歷史故事繪制工作，間接地影響女性進入「偉大藝術家」行列的可能。

博物館的展示如何呈現「女性」聲音，則是另一個挑戰。女性主義博物館學者史密斯 (Barbara Smith) 感嘆，即使使用了與女性有關的物品，也不一定能呈現女性的聲音。她描述曾經見過一個充滿家飾品、陶瓷器，甚至廚房中的鍋碗瓢盆等的十八世紀展覽，然而策展人抱持著既有的男性思維的觀點，因此還是對女性作品或物件「視而不見」。波特主張，展示應該勇於破除過去偏重客觀、理性

的論述立場，嘗試呈現主觀經驗與情感。總之，性別議題對歷史書寫的意義，不應該只是獨重女性，而是全面省思過去歷史論述在立場、價值觀、方法上的束縛，以及詮釋的可能性。

②……………性別研究與性別平等運動在臺灣

1980 年代，國立臺灣大學、國立清華大學與私立高雄醫學大學等即先後成立「婦女研究室」，開啟了臺灣兩性研究、婦女研究先聲，而超越兩性研究框架之性別研究在臺灣，則要到 1990 年代中期。1995 年是一個深具指標性的時間點，這一年，臺灣大學建築與城鄉研究所成立「性別與空間研究室」(Research Center of Gender and Space)，而中央大學成立「性／別研究室」(Center for the study of Sexuality and Difference)。前者關注空間環境中性別的問題，旨在打造「沒有性別歧視的城市」，不過焦點仍在女性與空間問題上；後者旨在拓廣更為多元的性別研究議題與方法，特別是從階級、族群、性別、年齡等社會差異結合同性戀等議題之相關研究，並著重區別「性」與「別」與「性別」等問題意識(魏懋文, 1996)。其後，1998 年領導學術研究之中央機構科技部正式成立「性別研究學門」，多所大學性別研究所前後成立。數個相關機構或刊物的名稱開始有所改變，原本「婦女」或是加入「兩性」或「性別」，有趣的是不管中文如何，英文名稱幾乎都是用「gender」。(李貞德, 2009 : 5)

在臺灣的性別研究成果如何呢？又有什麼樣的特色呢？有兩篇論文提供了一些整理與分析。黃淑玲與潘纓花⁽¹⁾(2010) 以臺灣唯一以性別與跨領域研究為主題的學術雜誌《女學學誌》為對象，整理 1990 年至 2007 年所有發表論文的主題、方法與對象。分析結果指出，《女學學誌》的研究主題極其廣闊豐富，特別是 2002 年之後，著力開發各類專題，作者群幾乎囊括所有人文社會科學學門，以及醫學類的公衛與護理，同時，可以看到婦女與性別研究的主題、方法與理論重視科際整合的強烈特色，但是研究內容幾乎偏重在女性研究範疇，同性戀、跨性別或者男性研究，非常稀少。而從研究主題來看，《女學學誌》排行前五名的熱門主題依序為「家庭」(21 篇)、「工作」(21 篇)、「社會與科技」(21 篇)、「理論」(19 篇)、「性別角色」(19 篇)。「家庭」類的文章探討親屬關係、婚姻屬性、婆媳、三代同堂、家庭地位、家庭平權、家庭經驗等議題。「工作」類的文章其內涵有婦女就業、勞動參與、職業婦女、農場婦女、護理人員、女紅等。「社會與科技」大多集中在談中年、老年婦女健康、婦產科等醫療問題和憂鬱症等心理疾病問題。「理論」類大多論及各種學門或議題的女性主義理論。「性別角色」類文章則探討角色壓力、角色態度、性別分工，以及母職、父職等議題。作者指出，臺灣的性別研究有兩個值得注意的現象：第一，仍然偏重早期國外女性主義強調質性研究的論述，尚未有研究者運用社會統計分析進行研究，因而婦女與性別研究的量化理論與知識仍待開拓。第二，性別理論的研究較為薄弱。

黃淑玲與謝小岑(2011) 檢視了臺灣社會學、教育學、西方文學／文化研究等領域，在 1990 年至 2007 年之間有關性別研究的研究論文概況，藉以評估性別研究在這三種學門主流化的程度及女性主義理論的影響力。作者以這幾個學術領域的主流期刊為對象，整理了出版數量、分析觀點、研究方法、研究主題等。作者指出，三種學門主流期刊中性別研究論文發表率不高，性別研究在各學門中被視為女性的、或女性化的研究次領域，因而並未成為學門主流議題。

同時，作者也指出(2011 : 220-221)，若進一步觀之，女性主義在三學門中的影響力差異甚大。°社

會學強調反身批判和社會實踐的特性與女性主義十分相近，因此其性別研究學者的女性主義認同也最高。教育學的學科特質強調規範性和功能性，與女性主義強調權力關係與社會批判卻正好相反，也使得性別研究在教育學門中是邊緣的，性別研究學者的女性主義認同也最低，因此，雖然性別平等教育已經成為重要政策，在主流教育學的世界卻不受重視。而在西方文學與文化研究領域的性別研究，則因許多研究者漠視女性主義高度政治性的價值，且未跳脫文本研究的單一框架，致使無法發揮性別學術研究與婦運結合的特質。

此外，黃淑玲與謝小岑（2011：184-186）認為，學術與社會運動雙向結合的現象，也是臺灣的性別研究的重要特色。關鍵因素是1993年成立的台灣女性學學會，該會主張婦女研究與女性主義、婦女運動三位一體的觀點，成為臺灣性別研究學者的共識。女性學學會會員的社會運動場域主要在國家體制外，或是以遊行、示威、公聽會、記者會、遊說等方式倡議性別相關法律與政策，或是藉由出版書籍、投稿報章、學校授課、社區演講等批判父權文化。許多性別研究學者直接參與婦女運動，同時將婦運所關注的議題、策略、過程及成果，做為性別研究探討與推動政策、制度改革的目標。

綜合上述可知，性別研究在臺灣，在如社會學、教育學、文化研究等相關學門被認同的狀況仍然不理想，甚至被視為女性化的研究主題而不被重視；然而，另一方面，由於跨學門之性別研究學會、學術期刊的成立，匯聚有志者參與投入，有助性別研究領域議題的開展，同時也重視與相關運動的呼應。

李貞德（2009）指出，在思想解放的背景下，臺灣的婦女運動進入90年代訴求多樣化，如反抗性侵、保障財產權、追求工作權等，街頭運動與抗爭等，十分活躍。然而，這些運動雖然都掛著女權運動之名，卻因階級或族群利益等經常有所衝突，也就是說，臺灣的社會運動也印證了過去性別研究者所指出的、「女性」不是一個同質群體的事實。

1985年，聯合國正式宣示「性別主流化」（gender mainstreaming）的理念，主張評估包括立法、政策、方案等各種計畫性行動，使男女雙方受益均等，達成性別平等的最終目標。這個國際宣言不但引起中央政府重視，女性主義學者與社團也積極吸納這個新方針，遂將性別主流化的概念引入，推動相關政策。具體的成為通過「性平三法」的『性騷擾防治法』（1995）、『兩性工作平等法』（2001），和『性別平等教育法』（2004）⁽²⁾。

從女性、到兩性和性別，揭示了台灣婦女運動行動焦點和思維模式的發展與演變。只不過，國家的性別平等政策，現階段仍然以保障女性權益為實務重點。2005年行政院婦女權益促進委員會推動性別主流化，各部會成立性別平等專案小組，行政院及所屬機關共五百多個委員會，並訂定女性委員性別比例不得少於三分之一的原則等。可以說，臺灣的國家性別平等政策現階段偏向國家女性主義（National Feminism），以改變、保障女性的社會地位、社會參與為主要目標。

③……………性別議題如何進入臺灣的博物館

在臺灣的女權運動、性別平等運動以博物館為核心基地的情況卻很少見，其中，2016 年由婦女救援基金會經營的「阿嬤家—和平與女性人權館」是極少數案例，近年也備受矚目。婦女救援基金會從 1992 年開始投入前臺籍慰安婦的調查以及協助向日本政府求償行動。二十多年來，除了陪伴與照顧慰安婦阿嬤們，也陸續保存了 5,042 件相關影音、書籍，以及 730 件文物，收錄了臺灣 59 位慰安婦阿嬤們的生命故事，是臺灣首座以「慰安婦」人權運動為基礎，集結當代女性人權議題展示及婦女培力的多功能社會教育基地。⁽³⁾

那麼，臺灣有關性別平等的法律與政策對博物館帶來什麼的影響呢？以國立臺灣歷史博物館為例，可舉以下兩點：2004 年的『性別平等教育法』第 18 條規定：「學校教材之編寫、審查及選用，應符合性別平等教育原則；教材內容應平衡反映不同性別之歷史貢獻及生活經驗，並呈現多元之性別觀點。」因此，博物館特別留意常設展中的等身大人偶之男性、女性比例不至過於懸殊。更為重要的是，在常設展中特別加入女性人物登場的歷史畫面，例如，原住民族與漢人簽訂土地租借契約，就紀錄觀之，原住民族這方的代表男女都有、而以男性居多，但在常設展中特別設計為女性代表出面的場景；也特別讓清代艋舺地區著名的成功女商人黃祿嫂登場，這也是罕見之例。也就是說，過去認為以多數、普遍現象為優先的歷史敘事原則，在性別平等原則之下，重視歷史中少數的身影，避免造成刻板的歷史與性別印象。此外，為因應 2012 年啟動的『消除對婦女一切形式歧視公約』，博物館擬定「性別平等計畫」，促使在典藏展示研究、觀眾服務、人事等面向都能推動性別平等意識與原則。⁽⁴⁾總之，透過國家法律與政策的推行，性別平等原則普遍地進入臺灣公立博物館的職場，稱為經營管理的原則之一。

但是，臺灣的博物館積極回應、反思與性別有關的刻板社會價值觀或歷史思維，主要原因並不在前述的國家性別平等政策。於臺灣做為多元族群、多元文化的複雜共同體，多元文化的政策議題高度受到關注。多元文化議題中的性別議題，其代表者如臺灣原住民族多樣的性別與權力關係，以及其所反映的社會結構，而近年更增加了對臺灣新移民中嫁入臺灣家庭之外籍女性的關注。1990 年以降，臺灣政府開放外國勞動力與東南亞、中國籍婚姻移民，使得台灣本土文化更具多元性與混雜性(hybridity)。不同於一般外籍勞工，外籍新娘進入臺灣家庭組織中，成為新世代的母親，對於臺灣的家庭結構與本土文化帶來不容忽視的影響。然而，從經濟條件不好的東南亞地區來的外籍新娘，被視為一種商品，助長了臺灣社會既有的男尊女卑的性別權力結構，在家庭中與社會中普遍不受尊重。近年有不少展覽或教育活動登場，旨在促進新世代之社會融合的問題，或者為了協助社會大眾進一步理解「新臺灣之子」的母親，包括其母國文化以及在臺灣遭遇的差異、適應與意識轉化等。

此外，豐富的博物館學研究與學術活動，也有助與博物館有關的當代社會議題快速進入論述與實踐。雖然臺灣的『博物館法』正式成立於 2015 年，但是早在 1996 年就在國立大學設立博物館學研究所（碩士班），目前全臺灣有三個以博物館為名的研究所，兩本學術期刊，近十年來平均每年至少有五、六個博物館主題的研討會。由於博物館學研究與教學之推動，二十多年來大量的博物館研究論文產出，

豐富了博物館研究的議題，社會包容取向的性別議題也是近年所矚目的，相關展覽也陸續登場。

④……………博物館，女性歷史的蒐藏／展示與歷史教育

在臺灣，性別論述對歷史學帶來了什麼樣的影響呢？1990 年代以降，兩性／性別意識的研究取向激盪了中國歷史研究、以及臺灣明清時期歷史研究，因為傳統歷史學所使用的文獻，幾乎都是男性所主掌、書寫的，有關婦女的紀錄也絕大部分都是男性書寫的，因此如何利用性別觀點解構文獻，揭開歷史詮釋的新視野與新主題，是有趣而充滿挑戰的課題。（李貞德，2009）

相較於歷史學界熱衷透過性別觀點探索歷史詮釋的新典範，國立臺灣歷史博物館對性別議題的關注，聚焦如何描繪大眾歷史中的女性身影，特別是如何收藏與展示。雖然大眾歷史與女性主義歷史研究是兩個不同的研究主張，但兩者其實有些相近之處：女性主義歷史主張應該放棄傳統史學由上俯瞰歷史的觀點，將研究重點從政治、軍事轉移到經濟、社會與文化領域，因此研究關懷也應該從政治人物與菁英轉移到大眾階級，例如勞工、女性與其他弱勢團體，除了公領域、也應該重視並討論私領域、個人經驗、主觀情感，並主張應運用實物、報刊、電影、劇本、日記等多元的資料，都具有歷史文本的價值，應該從根本破解歷史書寫中的男性觀點或國家共同體價值觀，打破過去性別刻板形象，尋求歷史詮釋的可能性。這些主張，以及擴展多元歷史書寫可能性的目標，其實跟後來登場的大眾史學趣旨相近。當然，兩者也有很大的不同，女性主義歷史學聚焦於女性或性別，並以有助改善女性社會地位為目標；大眾歷史關注大眾生活與記憶，為大眾而做，甚至鼓勵大眾自己書寫歷史，並以串連大歷史與小歷史的對話、擴展歷史的想像與認識為目標。

國立臺灣歷史博物館定位為「大家的博物館」，並以促進社會包容與文化平權等博物館之社會參與為己責。國立臺灣歷史博物館所推動的大眾歷史計畫中，有幾個計畫為「讓女性走入歷史」開啟了新的蒐藏與展示的可能性：2003 年博物館籌備階段啟動的「臺灣女人研究計畫」並建置網站，公開分享成果。該計畫從九個主題來蒐集女性史料，包括身體文化、婚姻與家庭、女性與臺灣的民間信仰、女性與日常生活、女子教育、不同工作場域的女人、女性人物特寫、女性創作、婦女運動等。這個計畫的目的，在於聆聽與紀錄女性生活經驗如何與國家政治、社會經濟、時代氛圍等相互勾連，女性又如何因應、面對、理解她所處的大環境，同時，這些訪談也是有意義的口述歷史材料

透過各項議題彰顯不同時期臺灣歷史中女性的各種形象，臺灣女人從家庭進入社會職場中，從身體的束縛到解放，期能呈現臺灣女人的文化特質。2008－2011 年期間所製作的「臺灣女人影像紀錄」，分為「戰爭中的女性經驗」、「女性的日常生活」兩個主題，就 48 位 60 歲以上的女性進行了細膩的口述歷史訪談，不但企圖讓個人經驗與大時代連結，也刻意地讓口述歷史與其現場本身，成為史料。此外，以個人生命史為單位的蒐藏，以及注重個人主觀經驗與情感的展示，都為博物館如何透過蒐藏展示回應性別議題提供了參考。（劉維瑛，2016）

做為歷史材料之一，口述歷史最初的目的即在於蒐集底層或弱勢者的聲音，反思制式歷史。在大眾歷

史的範疇裡，口述歷史佔有很重要的位置。這是讓歷史敘事主體讓給各種各樣的大眾的重要媒介，可以開拓出新的歷史書寫的主題與關懷。這個計畫的主持人劉靜貞(2016)，提到在計畫執行過程的反思。首先，口述訪談對象不訂定具體的標準，而從身邊的人脈搜羅。其次，執行過程面對了口述歷史收集製作的新問題：女性的生活經驗，如何提問呢？「日常生活」如何研究呢？以設定問題脈絡為主、依據受訪者個人生命脈動，也就是他們最感興趣的地方，逐步地牽動帶領出來。由於女性們的記憶，跟著她們的日常生活喜怒哀樂，很難任人翻檢。要從阿嬤們思維理路與記憶重點，循線追蹤。受訪者很難依照預定的問題，有條理、流暢的敘事，經常會跳躍、或反覆，也有不同的情緒。然而，這些非邏輯、非理性的表現，正是敘事者詮釋自身的表現，顯示了敘事者的主體性。

此外，劉靜貞對訪談內容的紀錄也有新的反思。訪談，過去多半透過專業者整理、編輯、潤飾，使其成為有敘事清晰的文本或紀錄片。但是，口述者敘事當下的語氣、表情、手勢動作等，有時比語言本身表達了更多的想法。因此，這個計畫將口述訪談現場與其過程本身，視為一種史料予以紀錄，採取音、像與文字共同保留的形式。雖然，如此錄製的內容很難成為大眾直接閱聽的材料，但是在提高做為口述歷史史料價值方面卻意義重大。

另外，國立臺灣歷史博物館在大眾歷史的收藏方法，也有新的嘗試。受贈文物，是台灣歷史博物館收藏的重要來源，目前捐贈者超過 300 人，捐贈文物數量約占總收藏量百分之二十三，博物館並定期展出捐贈文物內容，也就是說，來自「大眾」、「大眾觀點」的文物占了一定的比重，這一點，也呼應了博物館對大眾歷史的重視。2016 年的受贈文物展中，除了「百工」、「風俗」等一般性主題之外，特別規劃「時代人物」單元，挑選展出臺南金泉成雜糧行夫婦、國民美術畫家、助產士、舞蹈家、運動家、攝影家等六位各行業人物其豐富精彩的生命歷程與故事。這些藏品由其家族提供、經由博物館研究員的整理，以呈現其生命軌跡為目標，但觀眾仍在個人的文件之中，看到了過去傳統史學不容易紀錄下來的時代訊息。以助產士林女士的文物為例，我們看到當時助產士養成基本內容、資格證照以及生產所使用的輔助工具；或者以運動家為例，我們看到在日本時代特殊的藝術或體能才能，如何讓當時臺灣人的生命機遇有大不相同的展開。

「新台客」展覽，介紹 1960 年代以來，東南亞移民及移工的故事，而 1990 年代以降更是展覽重點。1990 年代以降的移民與移工，以越南、印尼、泰國、菲律賓及柬埔寨等五個國家來臺人數最多，移民來到臺灣不再是因政治因素的牽動，此時的移民和移工，每個人為了工作、讀書、結婚或追尋夢想等不同的理由而來，有著各自的經歷及故事。展覽邀請了十四位來自東南亞不同國家的移民及移工們，藉由他們的物件、影像、聲音、創作，讓我們透過不同的視野、從不同的角度，認識「新臺客」的多元樣貌。策展人希望藉由她與他的生命故事，讓我們更理解不同族群存在的自尊、驕傲與個人價值，也藉此讓這塊土地的人們，更加認識屬於這個世代的新臺灣。在這個展覽期間，博物館邀請了展示中的主人翁現身說法，為觀眾導覽，分享其個人經驗，讓展覽成為自我表述的媒介。

如上述，或者是為了保留受訪者本人的情感之口述歷史紀錄方法，或者有名有姓、有其人生、職業與情感的特定個人及其家族，進入國家博物館的蒐藏、成為展示的敘事軸線，乃是國立臺灣歷史博物館之大眾歷史關懷下歷史書寫的重要動向。

5 結論

重視歷史詮釋的民主化，是解嚴後臺灣社會發展的特徵之一。因此，面向公眾、面向社會成為臺灣的國家歷史博物館自詡的職責。台灣歷史博物館以大眾歷史為重要軸線，也嘗試了個人單位的、家族單位的蒐藏，以生命史為主體的展示與教育。因此，博物館對於性別議題的回應，其實是涵蓋在大眾歷史的關懷之中。大眾歷史的蒐藏與展示，雖然並不是以女性為限，但卻能呼應性別議題所重視的女性主體敘事、多元歷史觀點、女性在歷史之中等主張，也有了新的收集多元歷史資料的方法。以生命史為單位的歷史知識，如何與大歷史對話，如何讓博物館的歷史書寫從「私」的領域重新回到「公」的領域，是臺灣的歷史博物館持續反思與實踐的課題。

註

(1)——《女學學誌》為臺灣大學婦女研究室於1990年元月創刊，最初刊名《婦女與兩性學刊》，一年一期。2002

年改版為半年刊，並更名為《女學學誌：婦女與性別研究》。改版後每期都有主題、有助開發研究議題，並以全球華文社群為邀稿及發行對象。其推動的研究議題包括家庭、學校、勞動、醫療、性認同、歷史、學術場域之中的女性處境與性別關係，批判父權體制與男流思想，並提供替代性的女性主義觀點與反制策略，因此，也得以結合各人文、社會學門以及其他研究領域的婦女與性別研究學者。

(2)——2005年行政院婦女權益促進委員會推動性別主流化，各部會成立性別平等專案小組，行政院及所屬機關

共五百多個委員會，並訂定女性委員性別比例不得少於三分之一的原則等。

(3)——阿嬤家—和平與女性人權館官網，<https://www.twrf.org.tw/amamuseum/>。瀏覽日期，2018年3月23日。

(4)——但是，透過行政系統推動的性別平等，經常只能在形式層面有所約束，甚至對文化領域工作有所干擾。以無形文化遺產保護事業為例，性別平等的專家要求主管機關輔導那些國家指定的無形民俗文化財之保護團體，改變其中男尊女卑、帶有歧視女性觀點的民間習慣，但是這些要求，反而與無形文化遺產重視各社群之文化權、文化多樣性表現的主張有所抵觸。

參考書目

- 林慧嫻「尋找她的聲音：性別平權的博物館時代」『博物館學季刊』第19卷第2期、2005、23-32頁。
- 李貞德「導言 婦女、性別與歷史研究」李貞德主編『中國史新論／性別史分冊』聯經出版社、2009、1-17頁。
- 俞彥娟「從婦女史和性別史的爭議談美國婦女研究之發展」『近代中國婦女史研究』第9期、2001年、207-234頁。
- 黃淑玲、謝小琴「運動與學術雙向結合：台灣性別研究發展之跨學門比較」『女學學誌』第29集、2011、173-231頁。
- 黃淑玲、潘纓花「簡析《女學學誌》：看台灣性別研究趨勢」『婦研縱橫』第92期、2010、38-47頁。
- 蔣淑如「女性主義史學視角下的國中臺灣史教科書」『中等教育』第67卷第2期、2015、67-81頁。
- 劉維瑛「成就她們、故事才說得下去」劉維瑛主編『臺灣好說：臺灣女人影像紀錄』國立臺灣歷史博物館、2016、46-55頁。
- 劉靜貞「尋訪女性生活詩篇 以紀錄片為方法的思考」劉維瑛主編『臺灣好說：臺灣女人影像紀錄』國立臺灣歷史博物館、2016、8-35頁。
- 魏懋文「1995 臺灣：性別研究特定角度的興起」『婦女與兩性研究通訊』第38&39期、1996、31頁。

(國立臺北藝術大學博物館研究所 助理教授)